

研修報告書 No 31

地域研修を高知県で終えて、医療に関して視野が広がったように感じます。

大学病院でずっと研修していたため、病状が安定した患者さんは大学病院から地域の病院に転院をさせて、退院するという機会をよくみていました。地域の病院では、大学病院から転院され、そこからリハビリを行い、自宅へ退院していく過程をみることができました。また、大学病院では最先端の医療があり、薬剤も選べるほどありましたが、地域病院では限られた施設、薬剤で治療をしなければならず、出来る範囲でいかにして医療を行うかなど大学病院では経験できないことが経験できました。

最も印象に残っていることが訪問診療です。

訪問診療で、山の頂上にひとりであらされているお年寄りの家に行き、実際に生活している家を見ました。かろうじてライフラインがあるだけで、自給自足を行わなければ生活しなければならないような状態で、80歳や90歳のお年寄りが生活しており、病院に行くのは難しい実態をまのあたりにし、地域医療の実態を感じました。身体が問題ない時ならば、訪問診療でなんとかできますが、急変した場合は対応も厳しく、都会では一命を取り留めることができてもここでは間に合わない可能性が場所だなど思いました。高齢者も自分にとって不便な土地・家でも自分が長いあいだ住んでいた住居であるため、なかなか離れたがらない方が多くいらっしゃるということも知り、驚きました。また、住居もお風呂が家から離れていたり、土間があったりして、高齢の一人暮らしには向かない住居が多かったです。住居をみて必要な箇所に手すりをつけたりしており、高齢者がひとりでもまた少しでも住みやすい環境を整えていました。そのようにして、症状を訴えて病院にきた人だけをみるだけではなく、病院にひとりで受診できない方に、医療従事者が今後転倒し、一人での生活が困難になったりすることを予防する前に介入しているシステムを知りました。今後、このような高齢者が少しでも住みやすく、医療を受診させやすくすることが課題だなど思いました。

また、〇〇診療所では訪問診療時に虐待されている子供のところに食料を届けていました。そのような子供たちは病気になった場合に十分な治療を受けられず、受けるべき予防接種も受けられません。そのような家庭もあるということを知り、地域医療というのは高齢者だけでなく、子供の問題も考えなければならないということも感じました。

一ヶ月間というのは慣れてきた頃に終わってしまうため、地域医療はこんな感じなのかと感じているあいだに終わってしまったため、もう少し地域の人々の考えも聞いてみたかったなど思いました。高齢者がどんどん増加していき、さらに若者がどんどん都心へいくため、地域医療の課題は今後より多くなり、難しくなってくると思います。

私は今後も大学病院に就職し、働いていくと思います。しかし、このように地域医療あってこそその医療だと思えますし、常に高知県で一ヶ月間、経験した地域医療を忘れないで、仕事をしていきたいと思いました。また、何らかの形で今後地域医療に関わっていきたいと思いました。

充実した忘れられない一ヶ月間を過ごすことができました。ありがとうございました。